

小麦「ゆきちから」の追肥法

古川農業試験場

1 取り上げた理由

平成15年度に本県奨励品種として採用された製パン適性の高い硬質小麦「ゆきちから」の栽培では子実タンパク質の高位安定化（基準値：11.5%～14.0%）が望まれる。そこで、子実タンパク質の基準値を満たし収量を確保するための追肥法を検討したところ、追肥量の目安が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

1) 「ゆきちから」において、子実タンパク質の基準値を満たし収量を確保するための追肥量の目安は10a当たり窒素成分で下記のとおりである（図1，2）。

○ 幼穂形成期に2.5kg，減数分裂期に5kg，穂揃期に5kgの追肥を行う。

（参考）シラネコムギ：幼穂形成期に2.5kg，減数分裂期に5kg，穂揃期に2.5kgの追肥を行う。

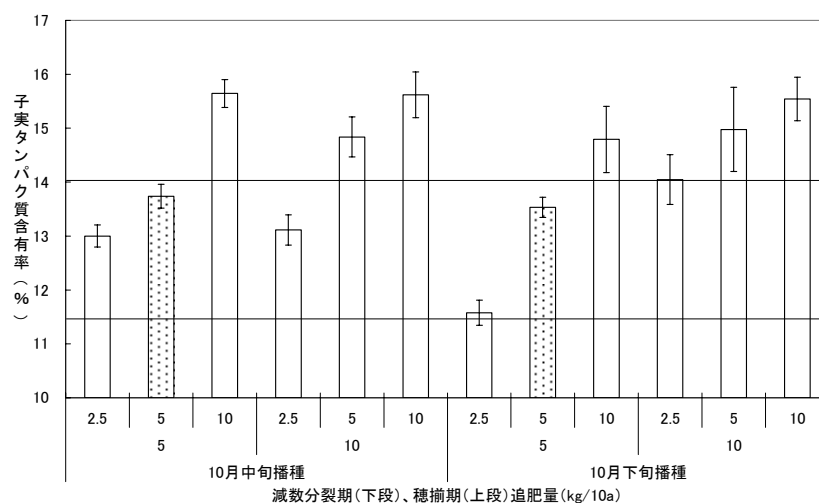


図1 減数分裂期，穂揃期の追肥量と子実タンパク質含有率の関係（3か年平均値）

注1）図中棒線は標準誤差を示す。

注2）幼穂形成期追肥は2.5kg/10aである。

注3）図中横線はパン・中華めん用小麦品質評価項目（たんぱく）の基準値の上限と下限を示す。

3 利活用の留意点

- 1) ここに示したデータは、古川農業試験場（北部平坦）において平成16～18年度の3か年に得られたものであり10月中旬は10月10日頃，10月下旬は10月25日頃の播種である。
- 2) 本試験での基肥は10a当たり窒素成分で8kgである。
- 3) 追肥には硫安を用いた。
- 4) 追肥は、普及に移す技術第83号の「小麦の葉耳間長による幼穂長の推定及び出穂期の予測」を参照して適切な時期に行う。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

転換畑における麦類生育と均質化技術の確立 (平成16~18年度)

2) 参考データ

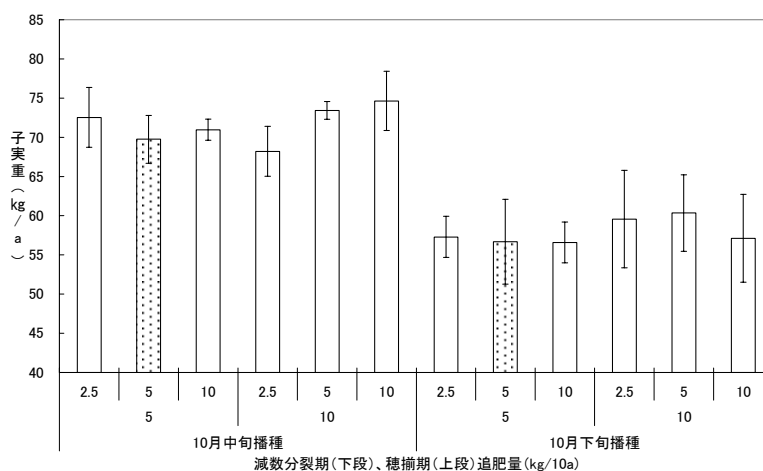


図2 減数分裂期、穂揃期の追肥量と子実重の関係 (3か年平均値)

注1) 図中棒線は標準誤差を示す。

注2) 幼穂形成期追肥は2.5kg/10aである。

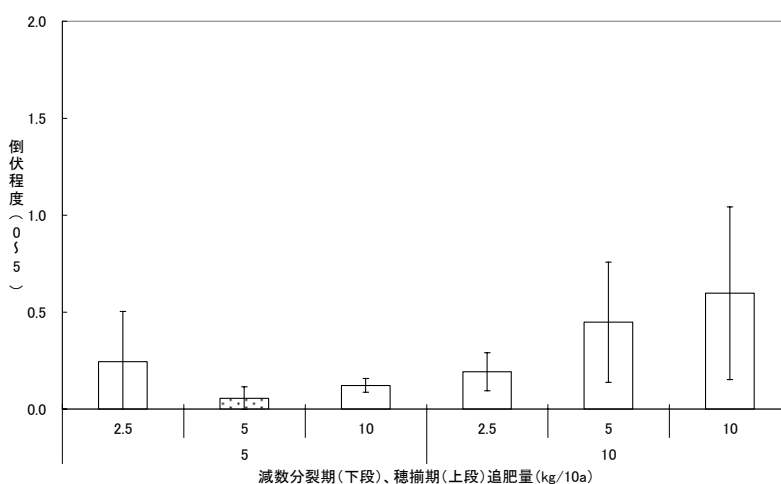


図3 減数分裂期、穂揃期の追肥量と倒伏の関係 (3か年平均値)

注1) 10月下旬播種は倒伏が観察されなかった。

注2) 図中棒線は標準誤差を示す。

注3) 幼穂形成期追肥は2.5kg/10aである。

注4) 倒伏程度は0(無), 1(微), 2(少), 3(中), 4(多), 5(甚)の6段階で表示。

3) 発表論文等

a その他

- a) 千田洋・関口道・滝澤浩幸 (2006) 小麦「ゆきちから」の穂揃期生育量と品質収量との関係. 東北農業研究59:53-54
- b) 千田洋・滝澤浩幸 (2006) 小麦「ゆきちから」における生育量と収量および倒伏との関係. 日本作物学会紀事 75(別2):78-79